

04年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量									価 格						ムロアジ		
	漁獲	養殖	産地	輸 入	消 費 地			消費支出 生(円)	在 加 工 庫 塩干	産 輸 地 入	消 費 地			消費支出 生(円)	漁 産 獲 地	地		
					生 鮮	冷 凍	塩 干				生 鮮	冷 凍	塩 干					
15	242	3	165.9	43.1	51.9	4.5	18.8	1,897	43.6	54.4	137	110	413	253	534	1,876	38	22.2
16	251	3	158.1	52.4	51.5	4.2	18.9	1,852	45.1	54.8	136	120	400	260	512	1,770	26	16.3
%	104	100	95	122	99	94	101	98	103	101	99	109	97	103	96	94	68	73

漁獲量と資源

16年の漁獲量は25万トンで、前年をやや上回る水準であったが、平成11年以降20-25万トン台でそれ以前の30万トンの水準に比べると低い。

本年は山陰海域が好調な漁獲であり、主体の東シナ海の水揚げがやや減少したのが目立っている。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976年の21万～29万トンから1977～1980年の11万～16万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998年には、45万～52万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2003年は43万トンであり、現在の水準としては中位といわれている。

また太平洋系群は1982年以降一貫して増大、特に1990年代中ごろ頂点に達し安定していた。しかしその後の加入量の減少により1997年以降資源量は減少に向かった。しかし、再度2000年、2001年には加入量の増大がみられたものの、2002年、2003年には加入量が減少している。現在資源状況は中水準で減少傾向にある。

以上のように何れも資源水準は中位であるが、親魚量の増加確保は、資源の安定的確保には極めて重要であるとともに、また当歳魚の漁獲の減少があれば、漁獲量の増加が期待できるとされている。

ムロアジ類

本年のムロアジは、引続き漁獲が前年をかなり下回っており資源状況の回復はみられておらず低位横ばいの状況が続いており、周年を通じてやや低調な漁獲にとどまっている。

(近年MAX：H2年 10.9万トン)

産地水揚量と価格(51港)

海域	海域別水揚量			月	月別漁獲量			月	月別価格推移		
	15年	16年	前年比		15年	16年	前年比		15年	16年	前年比
東シナ海	90.5	76.0	84	1	10.6	7.3	69	1	142	154	108
山陰	55.7	64.5	116	2	11.8	9.5	80	2	135	125	93
豊後水道	1.0	1.4	137	3	12.4	14.2	115	3	160	136	85
九州東岸	5.6	9.1	164	4	12.3	13.1	107	4	180	191	106
薩南	7.9	11.4	145	5	13.7	22.8	167	5	182	118	65
太平洋	3.3	2.6	79	6	10.5	15.0	143	6	222	151	68
その他日本海	7.6	2.2	29	7	7.4	13.5	183	7	263	155	59
				8	13.0	6.5	50	8	175	224	128
				9	20.6	9.3	45	9	104	158	152
				10	26.4	9.4	36	10	83	157	189
				11	18.9	18.5	98	11	75	92	123
				12	13.9	18.8	135	12	107	81	76
計	165.9	158.1	95	計	137	136	99				

16年のマアジの水揚げ量は、15.8万トンで前年(16.6万トン)をやや下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期(4~6月)に昨年同様好調であった。また、秋口の8,9,10月に昨年とは逆に漁獲の伸びがみられなかったことと、冬場の1,2月に低調であったことで、水揚げは前年を下回った。

しかし、山陰沿岸では昨年のように秋口9~10月主体の爆発的な漁獲ではなかったが、上半期、下半期ともコンスタントな水揚げがみられて、昨年を上回る水揚げであった。したがって、総漁獲量でも昨年以上に東シナ海の漁獲に近づいた。

太平洋側では薩南海域で前年をかなり上回る漁獲であった。また九州東でも台風の通過が多かった割には比較的好調であった

魚体は、東シナ海では100g以下のアジが55%(前年44%)(70g以下の豆アジは全体の36%前年31%)を占め主体であり、本年も昨年以上に魚体の小型化傾向が特に顕著であった。

山陰沿岸でも、依然、魚体の大きいマアジは少なく豆アジ(0~1歳魚)主体で推移し、依然型の大きいアジは僅かであった。

価格は、136円で水揚げの減少の割には型も小さくほぼ前年(137円)並みの安値であった。

輸 入

16年のアジの輸入は、5.2万トンで5~7万トンの近年の範囲内であり、前年(4.3万トン)を上回り、やや復活した。

本年は、オランダ1.8万トン(前年:1.3万トン)、ノルウェー0.5万トン(前年:0.8万トン)、アイルランド1.2万トン(前年0.8万トン)でオランダ、アイルランドの増加が輸入量の増加を反映している。また韓国も0.5万トンで前年(0.3万トン)をやや上回り、台湾からも0.4万トンと比較的多かった。

本年は、国内漁も引き続きやや好調であったが、輸入もサバの減少とは逆に増加傾向がみられた。

価格は、120円で前年(110円)を上回ったが、大西洋物はサバにみられるように相場の上昇が目立っており、青物類も買い付け競争が激化している。

在 庫 量

本年の在庫量は、4.5万トンと僅かながら前年(4.4万トン)を上回った。

これは、国内生産量の増加、輸入量の増加を反映したものである。

消費地入荷量と価格

16年の消費地入荷量(10大都市)は、5.6万トン(生5.2万トン、冷0.4万トン)で前年5.7万トン(生5.2万トン、冷0.5万トン)を僅かながら下回った。なお、塩干のみは1.9万トンでほぼ前年(1.9万トン)並みで漸減傾向が止まった。

本年の1世帯あたりの消費支出は数量・金額とも前年を下回り、単価安が反映した格好となった。

価格は、生400円(前年413円)、冷260円(前年253円)、塩干512円(前年534円)であったが、冷凍が前年をやや上回ったが、生鮮、塩干は引続き下落した。